

5-6	
主題	若年性認知症者に対する手続き（プライミング）記憶と常同行動の活用とその効果について
副題	新たな記憶と本人の居場所作り 一日でも長く今の自分を

キーワード1 若年性認知症	キーワード2 環境作り	研究期間	H27.2月～
---------------	-------------	------	---------

法人名	社会福祉法人 池上長寿園		
事業所名	大田区立糶谷高齢者在宅サービスセンター		
発表者：石井 未帆	アドバイザー：なし		
共同研究者：下地 政江・多田 多恵子			

電話	03-3745-3006	FAX	03-3745-3036
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人池上長寿園・糶谷事業部門は、特別養護老人ホームと地域包括支援センターが併設している為、「地域で安心して生活できる地域づくり」に積極的に貢献しています。当センターは、通所介護（介護予防）40名/1日、平均介護度2.2、平均年齢男性80.1歳/女性84.1歳（平成27年3月実績）。認知症対応型通所介護12名/1日の事業所です。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

他施設を利用していたAさん（65歳女性）は、「年寄りばかり」「行く意味がわからない」等の理由で利用をやめてしまい、地域社会との交流が途絶えてしまったと娘・ケアマネより相談があった。事業所としても初めての若年性認知症の受け入れでもあり職員に戸惑いがあった。事業所見学の際、本人/娘との会話のやり取り（本人の言動等）の中から、「行く目的がわからない」「居場所がない」という不安感や混乱を抱いていたのではないかと把握した。

しかし「年寄りばかり」という環境は変わらない中で「センターへ行く目的」「居場所がある環境」「必要とされている」と思って（感じて）もらえるよう、どのような個別ケアを行うかが事業所としての課題となった。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

「自分は周囲の人にとって大切な存在なんだ」「大切に思われているんだ」(パートナー・センター・ケア)と感じられること、本人が安心して過ごせる環

境（居場所）作り、「一日でも長く今の自分を（今出来ている生活）」維持出来る事を目標とした。

① 娘が結婚をしている事、8月に孫が生まれる事を記憶できていなかった為、個別ケアを通じて、新たな記憶を刷り込み、地域や家族との関係性を維持できる事を期待した。

② 常同行動に着目し、新たな行動パターンをすることで生活の範囲拡大等（自分から地域に入っていくなど）を期待した。

③ 本人を取り巻く各関係機関（ケアマネ・医療・他事業所・地域）及び家族とのこまめな情報共有・交換により、症状の変化に迅速に対応ができ、住み慣れた地域で本人が自分らしく生きる支援の在り方を目指したい（地域で見守るケア）。

《3. 具体的な取り組みの内容》

<平成27年2月利用開始>

・「センターへ行く目的」を明確化
⇒「ボラティア」ではなく、施設側から「お手伝い」をお願いし「お手伝いに行く」事を目的とした。声掛けで混乱させてしまわないように、職員の

声掛け方法の統一をした。

- お手伝い出欠表の作成

⇒本人にやりがいを感じてもらう為に、スマホを押す事とした。娘が自宅訪問した時には、利用状況がわかるようにした。

- 出掛ける前愛犬に餌やおやつを必ずあげるなどの（決まったことを繰り返し行う）常同行動に着目し、「セーターでの一日の外出スケジュール」作成
⇒本人の生活パターンや価値観を尊重し、初めは「休まず利用」を目標とした。通常の活動の他にお手伝い内容として「洗濯干し」「洗濯たたみ」昼食時の「おしぼり配り」「汁物配膳」をお願いした。娘より自宅での洗濯時、洗剤の入れ忘れが見られるようになってきたとの情報から「おしぼりの洗濯の一連動作を一緒に行う事」で「自宅でも洗濯動作が継続出来るよう手続記憶として繰り返し行った。

<娘とは細目に連絡し合いながら、3月担当者会議で情報共有>

- 新たな活動の提供

⇒「セーターに行く目的」が明確になってきたので、喪失感を与えないよう配慮しながら新たな活動を検討する。

⇒姉の洋裁学校のお手伝いや洋服を自分で作るなど、「裁縫が得意だった」事に着目し8月に生まれる孫の為に「バビ-用品を作る」事を新たな活動とした。8月に孫が生まれる→孫の為にバビ-用品を作ることを繰り返し、新たな記憶の刷り込みを行う。

<4月 認知症発生への対応>

- 娘の入院。早産の可能性があり、出産まで入院となる

⇒毎朝娘のコールで服薬の促しとセーターの準備を行っていたが娘の支援が出来ない状況となる。

⇒関係機関や地域で支援できる事を検討した。

セーターでは朝のコール(月～土)を同じ時間帯で行う、ケアマネ・包括職員も情報共有し娘とも相談の上、地域の見守りとして民生委員の協力をお願いし見守りを開始。

- 担当職員を作ることで信頼関係作り

⇒担当職員を中心に、支援を継続することで、

情報の整理や本人との顔なじみの関係となり、安心出来る環境を作った。

《4.取り組みの結果》

2月から利用開始。初めの1ヶ月は出欠表を忘れてしまったりと、本人の中での「目的」が明確ではなかったが、同じことを繰り返し行う事で、「自分はセーターにお手伝いに行っている」と認識し始めた。「年寄りばかり」ではあるが、その中でも「自分の居場所」ができて「必要とされている」と感じ始めた。また、出欠表や自宅のカメラに予定や知人とランチをした等のメモを記入するようになった。自分なりに忘れないようにする工夫が生まれた。バビ-用品を作る事で、「孫が生まれるから作っているの」と、新たな記憶の刷り込みが出来始めている状況である。

《5. 考察、まとめ》

同じことを繰り返して行う手続き記憶・常同行動の活用により、新たな記憶を刷り込む事で、生活範囲が拡大している。今は、マツヨリの総会に自ら参加したり、同じマツヨリの方の顔と名前を認識できるようにもなった。まだ支援は継続中ではあるが、若年性と診断されてからすぐに、このような取り組みを行う事で、「1日でも長く今の自分を」維持出来るのではないか。(認知症症状の緩やかな進行)

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- 熊本県若年性認知症ケアのポイント
- 認知症実践者研修/リーダー研修資料
- 北海道若年性認知症ケア・モデル事業報告

《8. 提案と発信》

失われにくい手続き(プライミング)記憶を意識し、上手くケアに取り入れる事は、本人の記憶の引き出し方が広がったり、新たな記憶が出来ると実感した。一人一人にあった個別ケアにより、「1日でも長く今の自分を」継続していきたい。